

小学校におけるオリンピック・パラリンピック教育に関する実践的研究

—2年生の I'mPOSSIBLE を活用した授業を通して—

佐々木 浩

1. 緒言

パラリンピックは、障害のあるトップアスリートが出場できる世界最高峰の国際競技大会であり、オリンピックの開催年に、原則としてオリンピックと同じ都市・同じ会場で行われている⁽¹⁾。そこでは、「失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」というパラリンピックの父、ルードヴィッヒ・グットマン卿の言葉を体現したパラアスリートたちの驚異的なパフォーマンスが、オリンピックと同様に観る者たちに大きな感動を与えている。このパラリンピックを主宰する団体である国際パラリンピック委員会（IPC）は、「スポーツを通じ、障害のある人にとってよりよい共生社会を実現する」ことを理念として、スポーツを通じて社会の変革を推進し、インクルーシブで多様性のある社会を実現することを目指している⁽²⁾。そして、この目標達成のためにパラリンピックアスリートたちは卓越したパフォーマンスで、世界中の人々にパラリンピックの4つの価値⁽³⁾を伝えることにより、人々の障害に対する意識を変え、社会の変革、いわゆる共生社会の実現を推進しているのである。

一方、大会開催に合わせて実施されるパラリンピック教育も、オリンピック教育と合わせ各国で展開されている。我が国でも、東京2020大会に向けて、スポーツ庁設置の有識者会議が、オリンピック・パラリンピック教育取組推進に向けて最終報告書を提出している。その報告では、スポーツの価値をはじめとして、オリンピック・パラリンピック教育の意義とその推進体制及び推進のための方策等、スポーツを通じた国際相互理解と世界平和の促進、並びに共生社会の実現・確立に向けて提案している⁽⁴⁾。また、学校教育では、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」において、「2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を、スポーツへの関心を高めることはもちろん、多様な国や地域の文化の理解を通じて、多様性の尊重や国際平和に寄与する態度や、多様な人々が共に生きる社会の実現に不可欠な他者への共感や思いやりを子供たちに培っていくことの契機ともしていかななくてはならない⁽⁵⁾」と示され、オ

オリンピック・パラリンピック教育の充実に向けその意義や必要性を投げかけている。

パラリンピック教育が大きな成果をもたらした例として、2012年のロンドンパラリンピックが挙げられる。ロンドン大会は、パラリンピックの歴史上、最高の大会の1つだと認知されており、チケットの売り上げは、2008年北京大会を100万枚以上上回る280万枚を記録し、組織委が掲げた目標250万枚をも大きく上回ったのである⁽⁶⁾。その成功の秘訣は、多くの家族連れが会場に足を運んだことにあったという。完売したチケットの75%を占めた家族連れが連日会場を大いに盛り上げたのである。イギリスパラリンピック委員会の報告によると、オリンピック・パラリンピック教育の教材である「Get Set」の普及により、子どもたちの3分の2以上が、障害に対する認識が変わり、その結果、子どもたち自身が家族に働きかけ試合を直接観戦する人が増えたということなのである。そして、その価値が認められた「Get Set」は、ロンドン大会後も教育プログラムとして使い続けられているという⁽⁷⁾。

このように、オリンピック・パラリンピック教育は単にスポーツを学ぶだけでなく、人としての生き方をはじめとして学習教材としては計り知れない魅力的な価値を有している。現に「Get Set」は、パラリンピックムーブメントの一端を担うものとなり、子どもたちにポジティブな影響をもたらした。同時に多大な評価を得て、同教育プログラムは2015年までにイギリス国内約24,000校で採用され、大会が終了した今もなお活用され続け、パラリンピック教育がレガシーとして受け継がれているのである⁽⁸⁾。

筆者は以前、中学校におけるパラリンピック教育に焦点を充てた実践的研究を行い、対象者のパラリンピックに対しての学習後の関心について報告した。その研究では、中学生はパラリンピックに純粋に感動し、授業の1か月後でも心に好印象として残っていることが明らかとなった⁽⁹⁾。そこで今回、本研究では、対象を小学校低学年（2年生）に設定し、国際パラリンピック委員会（IPC）公認教材である日本版「I'mPOSSIBLE」⁽¹⁰⁾を活用したパラリンピック教育の授業実践を行い、その成果と課題を明らかにすることを目的とする。障がい者のスポーツは「まず見る」こと、それが「障害を知る」ことになり、障がい者のスポーツ振興と理解につながるといわれている⁽¹²⁾。したがって本研究では、「I'mPOSSIBLE」を活用したパラリンピック教育を行うことで、小学校低学年の児童に対してもインスピレーションを与えることができるのか、パラスポーツに興味を抱かせることができるのかを明らかにし、パラリンピックのレガシーとしての可能性を探りたい。

2. 研究の方法

本研究では上記内容を踏まえ、小学校2年生を対象に、「パラリンピックそのものについての学び」と「パラリンピアンや障がい者の前向きな生き方からの学び」に焦点をあてた授業実践を行い、授業のまとめ時に記入した学習カードの分析からその成果と課題を考察する。

2-1. 対象と期日

- 対象：K 市立 K 小学校 2 年生全学級（男子 43 名，女子 47 名，合計 90 名）。対象児童は，パラリンピックの学習は初めてである。
- 期日：2019 年 3 月 8 日に，2 年生全学級を対象に「すごいぞ！パラリンピック」と題した座学としてのパラリンピックについての学習を実施し，次の時限に全体から 1 学級（31 名）を無作為に抽出し，体育館にてシッティングバレーボールの実技授業を行った。授業者は体育科教育学を専門とする大学教員である。

2-2. 教材の内容

本研究の授業実践では，国際パラリンピック委員会（IPC）公認教材である日本版「I'mPOSSIBLE」に多少手を加え，1 単位時間（45 分）で 2 年生全員（90 名）を対象に一斉に座学を行い（図 1），次時に 1 単位時間で 1 学級（31 名）を対象に，シッティングバレーボールの実技授業（図 2）を行った。

1. 教材名			
すごいぞ！パラリンピック			
2. 目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピックの実際の映像を視聴したり，その特徴についてクイズ形式で考えたりすることによりパラリンピックを学び，パラリンピックへの興味関心を深める。 ・パラリンピアンや障がい者の前向きな生き方について学び，諦めないことの大切さや，限界に挑戦することの尊さ，工夫すればできないことなんてないという気持ちを醸成する。 ・パラリンピックへの興味関心を深め，東京大会に向けてのインスピレーションを引き出し，保護者を含めた家族等にその感動を伝えることができる。 			
3. 指導上の留意点・工夫			
<ul style="list-style-type: none"> ・教師の一方向的説明にならないように，児童の気づきを大切に，より興味を持てるような展開（クイズや映像の使用）に留意する。 			
4. 展開			
	学習活動・内容	指導上の留意点	資料
導入	1. パラリンピックについて知っていることを振り返る。 2. 本時のねらいを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピックについて知っていることを学習カードに記入させる。 ・パラリンピックについて学ぶ意欲を持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習カード ・ppt シート

12分	<p>3. リオパラリンピックの映像を見る。</p> <div data-bbox="157 204 420 379"> <p>パラリンピックとは</p> <p>・リオデジャネイロ パラリンピックを 見てみましょう</p> </div> <div data-bbox="157 387 420 547"> <p>パラリンピックとは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリンピックと同じ年に同じところでおこなわれるしょうがいのある人によるスポーツ大会 ・「もう一つの(Parallel)オリンピック (Olympic)」 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・映像から「楽しそう」「おもしろそう」「すごい！」などの感想や「何だろう?」という疑問を引き出すようにする。 ・障害に関するネガティブなコメント(「足がなくてかわいそう」「手がなくて怖い」など)はできるだけ回避し、そういうコメントが出てきた場合は、映像や写真などから、とても速い、力強いなど、選手の素晴らしいところに着目するように促す。 	<p>パラリンピックとは</p> <p>・パラリンピックって何?</p> <p><small>学習カードに書いておきましょう</small></p> <p>・リオパラリンピック大会ダイジェスト映像</p> <div data-bbox="740 363 1002 523"> <p>パラリンピックとは</p>  <p>スリー・アギトス</p> </div>
展開33分	<p>4. パラリンピック大会について学ぶ。</p> <p>・パラリンピッククイズを行う。</p> <div data-bbox="157 635 420 826"> <p>パラリンピッククイズ</p> <p>○だい3もん 東京パラリンピック マスコットは どっち? ・ミライトワ ・ソメイティ</p>  </div> <p>5. パラリンピックから学ぶ。</p> <p>・パラアスリートたちの頑張りについて知る。</p> <p>・映像を見る。</p> <div data-bbox="157 946 420 1153"> <p>すごいぞ! パラリンピック</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その人にひつようなくふうやたすけをすることで... ・スポーツが楽しめる。 ・自分のげんかいにちょうせんできる。 ・全力できそいあえる。 </div>	<p>クイズから興味を持たせ、理解させる。</p> <div data-bbox="445 619 714 826"> <p>パラリンピッククイズ</p> <p>○だい2もん これは なんだろう?</p>  </div> <p>・自分たちもやればできるという気持ちにさせる。</p> <p>・希望や生きる勇気を感じ取らせる。</p> <p>・パラリンピアンたちの真剣な練習映像を視聴させる。</p> <div data-bbox="445 962 714 1177"> <p>すごいぞ! パラリンピック</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年れいもちがう。のこった力もちがう。 ・それぞれのせん手がそれぞれの力を見せてくれる。 ・もっている力をフルに生かしている。 ・生き方がかっこいい! </div>	<p>パラリンピッククイズ</p> <p>○だい3もん では、これは?</p>  <p>パラリンピッククイズ</p> <p>○だい4もん マラソンと車いすマラソンはどっちがはやく?</p>  <p>すごいぞ! パラリンピック</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たなきぼうやゆう気をあたえてくれる。 ・自分もやればできる! ・あきらめてはいけない! ・なぐしたものを数えるな、のこされたものをさいだいげんに生かせ!
まとめ5分	<p>6. 学習のまとめをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映像を見る。 ・学習を振り返りカードに記入する。 	<p>・障がい者の日常の姿から、今後の自分の生き方のヒントが得られるよう助言する。</p>	<p>・イギリスのテレビ局 channel4 作成の映像「We're The Superhumans」</p> <p>・学習カード</p>

図1 すこいぞ! パラリンピック学習指導案 (13)


1. 教材名			
シッティングバレーボールを楽しもう！			
2. 目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・シッティングバレーボールを体験することでバラスポーツを身近に感じ、興味を持つことができる。 ・シッティングバレーボールという、座ったままで楽しめる工夫をされた協働の体験を通して、下肢に障害があるから「できない」のではなく、あっても「できる」競技であることを理解し、目的を達成できるように工夫することの大切さを考えるきっかけとすることができる。 			
3. 指導上の留意点・工夫			
<ul style="list-style-type: none"> ・シッティングバレーボールはもとより、ネット型のゲーム自体の学習経験が少ないので、基礎になる練習を取り入れる。 			
4. 展開			
	学習活動・内容	指導上の留意点	資料・用具
導入 12分	1. 本時のねらいと学習内容を知る。	シッティングバレーボールを楽しもう。	
	2. シッティングバレーボールについて知る。 ・映像を見る。 3. 準備運動をする。 ・ジャンプ、スキップ ・座ってのストレッチ ・座っての受け身	<ul style="list-style-type: none"> ・バレーボールとの違いを確認する。 ・座ることが多いので事前に体温を上げておく。 ・転倒時の頭部保護のため尻座からの受け身を経験させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピックのシッティングバレーボールの映像
展開 33分	4. シッティングバレーボールの予備的な練習を行う。 チーム分けを行う。 ・おしり鬼 ・おしりリレー ・フーセンパス	「お尻鬼」 <ul style="list-style-type: none"> ・お尻はつけたまま追いかけてり逃げたりする 「おしりリレー」 <ul style="list-style-type: none"> ・フーセンがバトン、お尻をつけたまま移動する 「フーセンパス」 <ul style="list-style-type: none"> ・お尻をつけたまま円陣を組みパスをする。 	
	5. シッティングバレーボールのゲームを行う。 ・3対3	<ul style="list-style-type: none"> ・回数を数えさせる。 ・チーム内で声を掛け合いながらできるように助言する。 	
まとめ 5分	6. 学習のまとめをする。 ・感想を発表する。 ・学習カードを記入する。	<ul style="list-style-type: none"> ・気づきや驚き、上手にできるコツやチーム内の協力について称賛する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・フーセン (中にビーズが入ったもの) ・カラーコーン ・スズランテープ ・学習カード

図2 シッティングバレーボール学習指導案 (14)

2-3. 授業の実際

(1) すごいぞ！パラリンピック

本実践は、「パラリンピックそのものについての学び」と「パラリンピアンや障がい者の前向きな生き方からの学び」の2つの学習内容を設定して展開する。一つ目の「パラリンピックそのものについての学び」では、パラリンピックへの興味関心を高め、東京大会に向けてのインスピレーションを引き出し、保護者を含めた家族等にその感動を伝えることができることをねらいとする。二つ目の「パラリンピアンや障がい者の前向

きな生き方からの学び」では、パラリンピアンへの練習映像や障がい者の前向きな生き方から、諦めないことの大切さや、限界に挑戦することの尊さ、工夫すればできないことなんてないという気持ちを醸成することをねらいとする。

実践の「導入」では、自らのパラリンピックの知識を呼び起こしてから、リオデジャネイロパラリンピックのダイジェスト映像を視聴し、パラアスリートたちの驚異的なパフォーマンスを再確認することにより授業をスタートさせる。小学校2年生の子どもたちは、パラリンピックに関しての予備知識がさほどなく、映像視聴からの導入は多くの子どもたちにインパクトを与え、本授業のねらいへ導くのに効果的であると考えられる。

「展開」では、最初にパラリンピックについてクイズ形式の学習をする(図3)。その際、低学年の子ども達にもなじみのある大会マスコットのクイズから入り、子供たちの学習の意欲付けを図る。後半部分では、パラアスリートたちの頑張りについて学習する。そこでは、パラリンピアンへの真剣な練習映像を視聴し、人間の限界に挑戦している美しさやかっこよさから、希望や生きる勇気を感じ取らせる。

授業の終わりでは、イギリスのテレビ局 channel 4 作成のパラリンピックプロモーション映像「We're The Superhumans」を視聴し、障がい者の日常の姿から、今後の自分の生き方のヒントが得られるよう助言する。そして、各自授業を振り返り学習カードに記入することにより授業をまとめる(図4)。



図 3

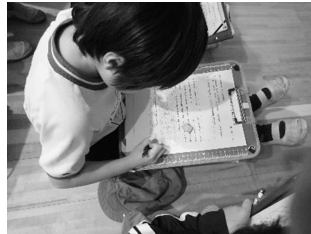


図 4

(2) シットイングバレーボールを楽しもう！

本実践は、パラスポーツの一つであるシットイングバレーボールを実際に体験することにより、パラスポーツを身近に感じ、興味を持つことができることを目的とする。また、シットイングバレーボールという、座ったままで楽しめる工夫をされた協議の体験を通して、下肢に障害があるから「できない」のではなく、あっても「できる」競技であることを理解し、目的を達成できるように工夫することの大切さを考えるきっかけとした。

実践の「導入」では、最初にパラリンピックのシッティングバレーボールの映像を視聴することにより、子どもたちにルール等バレーボールとの違いを気づかせる。そして、下肢に障害があってもなくても誰でもできるスポーツであることを確認し、興味を抱かせることにより本時のねらいに結び付ける。準備運動では、尻座で行う運動を取り入れるとともに、不慣れな姿勢で行うスポーツなので、転倒時の頭部保護のため尻座からの受け身も経験させる（図5）。

「展開」部分では、シッティングバレーボールの予備的な運動として、「おしり鬼」「おしりリレー」「フーセンパス」を行う。「おしり鬼」と「おしりリレー」（図6）は両方ともお尻を床に付けたまま移動することを楽しさを味わう教材であり、「フーセンパス」は、お尻をつけたまま円陣を組み互いにパスをし合う教材である。「フーセンパス」では、子どもたちは、お尻をつけたままの前後左右の移動に慣れていないので、多くの子が楽しめるようにボールは滞空時間の長い風船（ビーズ入り）を使用する。そして、お尻で移動する動きや風船の扱いに慣れた後、メインゲームとして3対3のシッティングバレーボールを行う（図7）。子どもたちには、チーム内で声を掛け合いながらできるように助言する。

授業の終わりでは、本時の学びを振り返り、気づきや驚き、また、上手にできるコツなどをカードにまとめさせる。最後に数人の児童に感想を発表してもらい、学びの共有を図り授業をまとめる。



図5



図6



図7

3. 結果と考察

(1) すごいぞ！パラリンピック

授業の「まとめ」として、学習カードを用いて本授業の振り返りを行った（表1）。設問1と設問3～6までは男女別に、設問2.7.8に関しては、同じ意味と読み取れる内容は共通ワードごとに男女別に集計した（図8.9.10.11）（表2.3.4）。

表 1 すていぞ！パラリンピック学習カード

「すていぞ！パラリンピック」学習カード	
1. 「パラリンピック」を知っていますか (よく知っている・だいたい・ちょっとだけ・名前だけ・はじめて聞いた)	
2. 「パラリンピック」について知っていることがあれば書いてください	(自由記述)
3. 授業はわかりやすかったですか	(はい・どちらでもない・いいえ)
4. 授業はためになりましたか	(はい・どちらでもない・いいえ)
5. 「パラリンピック」をもっと知りたくなりましたか	(はい・どちらでもない・いいえ)
6. 授業について家の人に話してみたいですか	(はい・どちらでもない・いいえ)
7. 授業について家の人に話したいことがあれば書いてください	(自由記述)
8. 授業でわかったことや感じたことを書いてください	(自由記述)

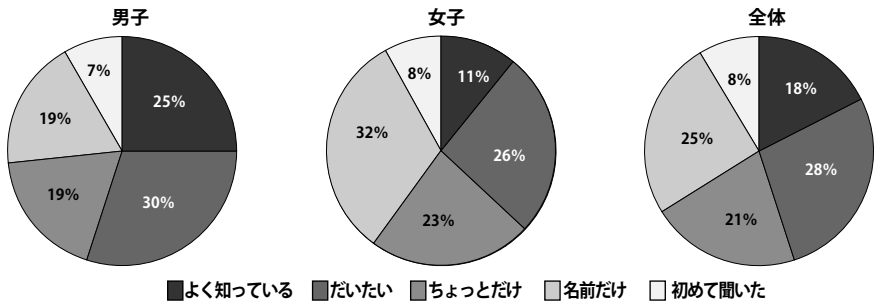


図 8 設問 1 集計結果

表 2 設問 2 集計結果

2. 「パラリンピック」について知っていることがあれば書いてください (自由記述)	男	女	合計
手や足が不自由な人がやるのがパラリンピックです	1	0	1
手や足が目が見えない人のやる競技です	1	0	1

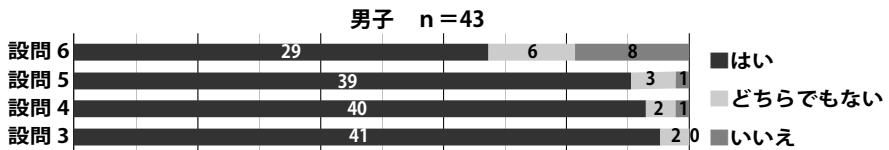


図 9 設問 3～6「男子」集計結果

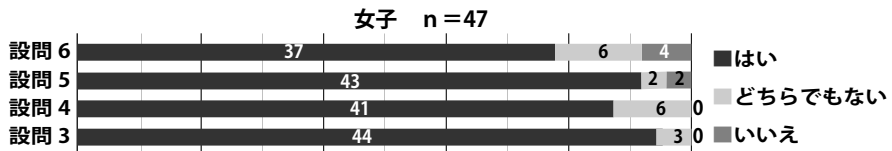


図 10 設問 3～6「女子」集計結果

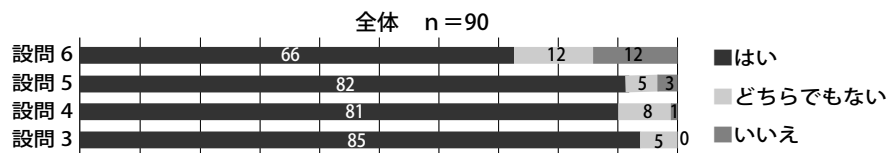


図 11 設問 3～6「全体」集計結果

表 3 設問 7 集計結果

共通ワード記述延べ人数	男	女	合計
「パラリンピックのこと」	12	14	26
「すごい・すごかった」	9	9	18
「なくても・不自由でもできる」	2	11	13
「なくても・不自由でも、頑張る・頑張っている」	3	8	11

表 4 設問 8 集計結果

共通ワード記述延べ人数	男	女	合計
「すごい・すごかった」	13	12	25
「なくても・不自由でも、できる」	11	11	22
「分かった」	11	9	20
「なくても・不自由でも、頑張る・頑張っている」	5	8	13
「なくても・不自由でも、あきらめない」	3	3	6
「もっと知りたい」	3	3	6

その結果、授業の導入段階で行った設問 1「パラリンピックを知っていますか」では、男子の 55%，全体では約 46%の児童が「よく知っている」または「だいたい知っている」と回答した（図 8）。しかし、設問 2「知っていることがあれば書いてください」では、回答した児童は男子 2 名しかなかった（表 3）。このことから、学習前段階では、子どもたちは自己認識としてパラリンピックに対するイメージは半数近く持ててはいるが、それを言語として具体化するところまではまだ理解していなかったと推察することができる。

設問 3「授業はわかりやすかったですか」設問 4「授業はためになりましたか」では、両設問とも全体で 90%以上が「はい」と答え、設問 3 では「いいえ」という回答が男女とも「0」であった（図 9.10.11）。このことから、本授業の実践は、児童にとっても分かりやすく好印象であったことが推察できる。また、同様な結果は、次の設問 5「『パラリンピック』をもっと知りたくなりましたか」という設問にも見られ、全体で 82 人と約 91%が「はい」と回答している（図 11）。この結果からも、本実践は子どもたちの心を揺さぶる授業であったことがいえる。この授業をきっかけとして、多くの子どもたちがパラリンピックについて学びを深めるきっかけになることを期待したい。

設問 6「授業について家の人に話してみたいですか」では、全体で 66 人、約 73%が「は

い」と答えた(図 11)。特に女子は 37 人の 80% 近くが「はい」と答える結果となった(図 10)。これに関しては、設問 7 において具体的に話したい内容の自由記述では、実際に学習したパラリンピックの内容を伝えたいとしている児童が多かったが、「すごい・すごかった」のワードが多数出現し、授業で視聴した映像に純粋に感動したことを伝えたいとしている児童も多くいることが分かった(表 3)。さらに、設問 8 の授業で分かったこと感じたことの自由記述欄でも、「すごい・すごかった」のワードを使った児童が男女とも一番多くみられた。以上のことから、多くの子どもたちはパラリンピアンたちのパフォーマンスや障害のある人たちの努力に純粋に感動し、家庭でその学びを伝えたいと思ったことが分かる。したがって、本授業のねらいの一つである、パラリンピックへの興味関心を高め、東京大会に向けてのインスピレーションを引き出し、家族等にその感動を伝えることができることに関しては、多くの児童が前向きにとらえることができたと考えることができる。

さらに、設問 7,8 の自由記述に、なくても・不自由でも「できる」「頑張る・頑張っている」「あきらめない」のワードの記述がみられた。このことから、パラリンピアンや障がい者の前向きな生き方から、諦めないことの大切さや、限界に挑戦することの尊さ、工夫すればできないことなんてないという気持ちを醸成することもできた児童もいたことが分かる。

(2) シットティングバレーボールを楽しもう！

本授業においても、学習の「まとめ」としてカードを用いて振り返りを行った(表 5)。設問 1～10 までは男女別に、設問 11,12 に関しては、同じ意味と読み取れる内容は共通ワードごとに男女別に集計した(図 12,13,14)(表 6,7)。

表 5 シットティングバレーボールを楽しもう！学習カード

「シットティングバレーボールを楽しもう！」学習カード	
1. 深く心に残ることや感動することがありましたか	(はい・どちらでもない・いいえ)
2. 今までできなかったことができるようになりましたか	(はい・どちらでもない・いいえ)
3. 「わかった」とか「そうか」と思ったことがありましたか	(はい・どちらでもない・いいえ)
4. 楽しかったですか	(はい・どちらでもない・いいえ)
5. 自分から進んで学習することができましたか	(はい・どちらでもない・いいえ)
6. めあてにむかって何回も練習できましたか	(はい・どちらでもない・いいえ)
7. 友だちとなかよく協力してできましたか	(はい・どちらでもない・いいえ)
8. 友だちと互いに教えたり、助けたりしましたか	(はい・どちらでもない・いいえ)
9. またやってみたいですか	(はい・どちらでもない・いいえ)
10. 家の人に話してみたいですか	(はい・どちらでもない・いいえ)
11. 家の人に話してみたいことがある人は書いてください	(自由記述)
12. わかったこと感じたこと	(自由記述)

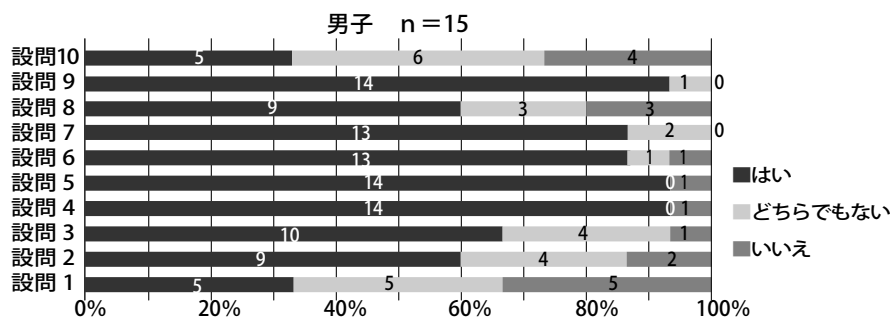


図 12 設問 1～10「男子」集計結果

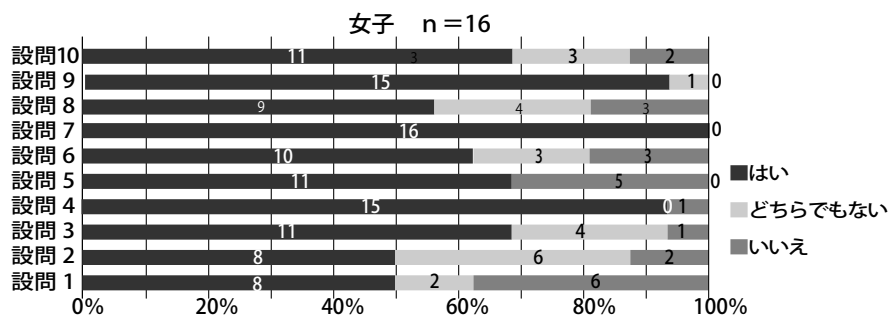


図 13 設問 1～10「女子」集計結果

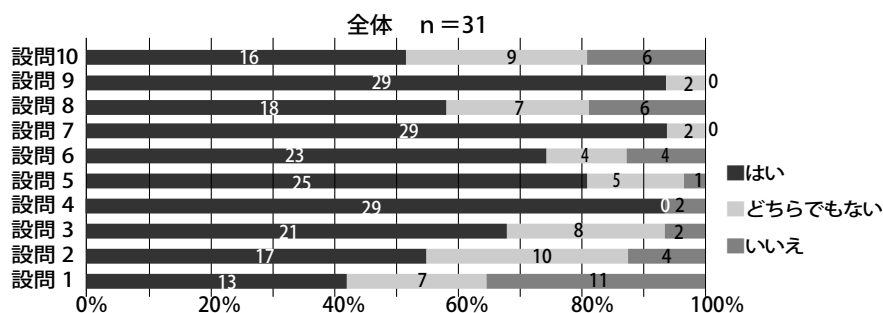


図 14 設問 1～10「全体」集計結果

表6 設問 11 集計結果

共通ワード記述延べ人数	男	女	合計
「座って・お尻をつけて、やること」	3	6	9
「楽しかった」	4	3	7
「足が不自由でもできる」	0	2	2
「初めてやった」	1	0	1

表7 設問 12 集計結果

共通ワード記述延べ人数	男	女	合計
「難しかった」	8	2	10
「楽しかった」	5	5	10
「お尻をつけてやるのが分かった」	0	3	3
「勝ててうれしい」「相手が強い」「点を入れられて悔しい」	3	0	3
「みんなでやればできる」	0	2	2
「動きづらい」「疲れちゃう」	0	2	2
「座ってやるのは難しいのに、選手はすごい」	1	1	2
「残っている手を使ってできるスポーツなのでいい」	0	1	1
「障害がある人無い人一緒にできるから仲が深まっていい」	0	1	1

その結果、設問4「楽しかったですか」と設問9「またやってみたいですか」で、両方とも「はい」という回答が全体で93%以上という高い数値を示した（図14）。この設問は、特に児童の「関心・意欲」を問うものであり、その数値が男女とも差がなく高いということは（図12.13）、子どもたちがシッティングバレーボールの授業に高い関心と意欲を示したということがわかる。したがってこの結果より、本授業の一つ目のねらいである「パラスポーツに興味を持つことができる」は、おおむね達成できたと考えることができる。

また、男女別でみると、男子では設問5「自分から進んで学習することができましたか」と、設問6「めあてにむかって何回も練習できましたか」の「はい」という回答が約90%と女子より高い値を示している（図12.13）。この設問は両方とも学習に対する「意欲」を問うものであり、この結果から男子は、高い意欲をもってシッティングバレーボールに取り組んでいたことが推察できる。女子に関して言えば、設問10「家の人に話してみたいですか」で、男子のおおよそ2倍の約70%の児童が「はい」と回答していた（図12.13）。この設問は、前時の学習「すごいぞ！パラリンピック」と同じであり（表1）、結果も同じく女子の「はい」の回答が高い傾向になった。（図9.10）。

設問11.12の自由記述に関しては、両設問とも「楽しかった」という共通ワードが男女の違いなく多く出現していた（表6.7）。このことから、本授業に対する好感度の高さを推察することができる。また、男子の記述の中で「楽しかった」とともに多くみられたのが「難しかった」と「勝ててうれしい」「点を入れられて悔しい」といったワー

ドであり、このことから、男児がシッティングバレーボールを純粹にスポーツとして楽しみ取り組んでいたと推察することができる。他方、女子に関しては少数ではあるが、「足が不自由でもできる」「残っている手を使ってできるスポーツなのでいい」「みんなでやればできる」「仲が深まっていい」といった記述を見ることができた。このことは、女子児童が、設問7「友だちと仲良く協力してできましたか」において100%「はい」と回答していることと合わせて、シッティングバレーボールといった工夫されたパラスポーツ自体を、みんなでできるスポーツとして、好意的な印象持つことができたと考えることができる。

4. まとめ

本研究は、小学校2年生を対象にして、国際パラリンピック委員会（IPC）公認教材である日本版「I'm POSSIBLE」を活用したパラリンピック教育の授業実践を行い、小学校低学年の児童に対してもインスピレーションを与えることができるのか、パラスポーツに興味を抱かせることができるのかを明らかにすることを目的として実践した。「I'm POSSIBLE」という教材名には、「不可能（impossible）だと思えたことも、ちょっと考えて工夫さえすれば何でもできるようになる（I'm possible）」という、パラリンピックの選手たちが体現するメッセージが込められている⁽¹⁵⁾。教材の作成に携わった日本障がい者スポーツ協会の安岡由恵国際課長は「障害でできないことがあっても、器具やルールを工夫することで、同じように競技をすることができることを、教材を通じて知ってもらいたい。その上で自分たちがどのような行動ができるかを考えるきっかけになれば」という⁽¹⁶⁾。

本研究の授業実践「すごいぞ！パラリンピック」（座学）と「シッティングバレーボールを楽しもう！」（実技）では、どちらの授業とも子どもたちは好意的に受け止め、パラリンピックをもっと知りたいと思い、パラスポーツをまたやってみたいと思うことができた。また、学習前はパラリンピックに関して記述回答した児童は男子2名のみであったが、授業後は男女を問わず多くの児童が、気づきや感動を言葉で表すことができた。さらに、女子児童を中心に多くの子どもたちが、学んだことを家の人に話してみたいという感想を抱くこともできた。このことから、パラリンピックの価値の一つである、インスピレーション（人の心を揺さぶり、駆りたてる力）を与えることができたと推察することができる。本授業実践で、子どもたちはパラリンピックを知り、パラスポーツを身近に感じ、興味を持つことができたと推察される。

パラリンピックは、共生社会を具現化するための重要なヒントが詰まっている大会である。また、社会の中にあるバリアを減らしていくことの必要性や、発想の転換が必要であることにも気づかせてくれる⁽¹⁷⁾。東京 2020 大会では世界中から訪れる観光客やメディアによって、パラリンピックの価値が全世界に広められる。このような絶好の機会に、ロンドンパラリンピック教育の「Get Set」がもたらした効果のように、東京 2020 大会にもパラリンピック教育を学んだ子ども達を含む多くの家族連れが会場に訪れることを期待したい。そのためには、今回本研究で、学んだことを家の人に話すきっかけづくりが成果として表れたので、今後はさらなる家庭との連携を深めた研究の推進が課題と考える。

〈注〉

- (1) 日本パラリンピック委員会 HP.
www.jsad.or.jp/paralympic/ (2019 年 11 月 15 日閲覧)
- (2) オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議 (2016). オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告. スポーツ庁. p.3.
- (3) ・勇気 (Courage)：マイナスの感情に向き合い、乗り越えようと思う精神力
・強い意志 (Determination)：困難があっても、諦めず限界を突破しようとする力
・公平※ (equality)：多様性を認め、創意工夫をすれば、だれもが同じスタートラインに立てることを気づかせる力
・インスピレーション (Inspiration)：人の心を揺さぶり、駆りたてる力
※ IPC 発表の英語表記は「Equality」でありその一般的な和訳は「平等」だが、「平等」な状況を生むには、多様な価値観や個性に即した「公平」な機会の担保が不可欠である。そしてそのことを気づかせてくれるのがパラリンピックやパラアスリートの力である、という点を強調するため、IPC 承認の下、あえて「公平」としている。
日本パラリンピック委員会 HP.
www.jsad.or.jp/paralympic/ (2019 年 11 月 15 日閲覧)
- (4) オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議 (2016). オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて 最終報告. スポーツ庁.
- (5) 中央教育審議会 (2016). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について (答申). 文部科学省. p.12.
- (6) 日経電子版「オリパラ select」<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO28995350U8A400C1000000/>
(2019 年 11 月 16 日閲覧)
- (7) 日本財団パラリンピックサポートセンター HP. パラリンピック研究会第 34 回ワークショップ

- ブ <http://para.tokyo/2019/09/34.html> (2019 年 11 月 16 日閲覧)
- (8) 日本財団パラリンピックサポートセンター HP. パラサポ web
<https://www.parasapo.tokyo/topics/2171> (2019 年 11 月 16 日閲覧)
- (9) 佐々木浩 (2018). オリンピック・パラリンピック教育実践に関しての一考察・中学校における取組を通して - . 初等教育論集第 19 号. pp.42-58.
- (10) 日本版「I'mPOSSIBLE」は、パラリンピック教育のためにアギトス財団が開発した国際版教材の内容をもとに、日本の教育現場での活用のしやすさを考慮して、日本財団パラリンピックサポートセンターと日本パラリンピック委員会が公益財団法人ベネッセこども基金と共同開発した教材であり¹¹⁾、2017 年 4 月に全国の小学校に、2018 年には第 2 版が中学・高等学校も加えて全国に無償で配布され、2019 年には、小学校第 3 版、中学・高等学校第 2 版が全国の 36,000 校に無償配布された。教材名には、「不可能 (Impossible) だと思えたことも、ちょっと考えて工夫さえすれば、何でもできるようになる (I'm possible)」という、パラリンピックの選手たちが体现するメッセージが込められている。筆者も直接お話を伺ったが、作成に関わった日本財団パラリンピックサポートセンター推進戦略部プロジェクトマネージャーのマセソン美季氏によると、この教材の活用を通して、2020 東京パラリンピックをきっかけに、障がいのある人への意識や行動が、子ども達から変わることを目指しているという。パラリンピックについて学び、理解し興味を持って応援に行くことで、「パラリンピアンはカッコいい!」と感じ、競技場を出た後にも自然に障がい者に対する意識が変わり、社会を変えていけると思うという。
- (11) I'mPOSSIBLE 日本版事務局 (2017) I'mPOSSIBLE [教師用ハンドブック] p.44.
- (12) 高橋明 (2010). 障害者とスポーツ. 岩波新書. 岩波書店: 東京. p.151.
- (13) I'mPOSSIBLE 日本版事務局 (2017) I'mPOSSIBLE 教師用指導案テーマ 1 パラリンピックの価値. pp1-3.
- (14) I'mPOSSIBLE 日本版事務局 (2017) I'mPOSSIBLE 教師用指導案テーマ 2 パラスポーツ. pp1-3.
- (15) Tokyo 2020 for KIDS
<https://education.tokyo2020.org/jp/about/education-programme/> (2019 年 12 月 2 日閲覧)
- (16) 読売新聞「先読み TOKYO2020」(2017.11.14). 「不可能を可能に」知る
- (17) 日本パラリンピック委員会 HP.
www.jsad.or.jp/paralympic/ (2019 年 12 月 3 日閲覧)